

76
1185
5

長崎聞見録卷之五

目録

まてきき日あたる事	牛膽南星
あうくらとと	のどろやう
蜜紅花	蛇頭石
づとやうとごらほふ	うらひいん
阿蒙陀菓子	ころつふ
紅毛縮砂	うらあきと
蜜栗	寧國水仙
仁魚	飛魚

長崎



落里波

ラガル

落斯馬

航魚

海女

海人

吸玉

弦朝顔の盃

河景院びんのす

ひゆるすとろうとどみくみ

新製遠目鏡

紅毛人外科箱のす

長崎国見録卷之五

とてまきさくあたるれ事

とてまきれを猛るり。口あたるはあるり。響人おぼくあ茶の名なり。け水茶
 いとろく。猛烈なるものにて。城は紙るど紙屋く引揚るふ。忽ち細氣立の
 がる。洞織の糸は懸備するふ。みか腐穢と。響人細板紙彫るふ。まづ穢とみく。
 その幟面は細畫まこと文字などを彫りて。さてけあ茶紙。彼彫るる幟れる
 ころぐへ。一タ垂てを幟とほひ落すふ。何の音もさく。種々の彫刻はりく
 と。如松とるるり。まことに腐茶第一の種あるり。稀におぼくは。公依の御堂
 上とるる。室とをいへく。響茶よるれりのるり。そと穿縫をよるふ。響茶は丹卷

海女 人魚

半身は人の女に似たり。
才牙は下の魚に似たり。人魚
界を切能く下魚と為る不
妙業と。言傳ふ。ペレムト云。
如も人持る事あり



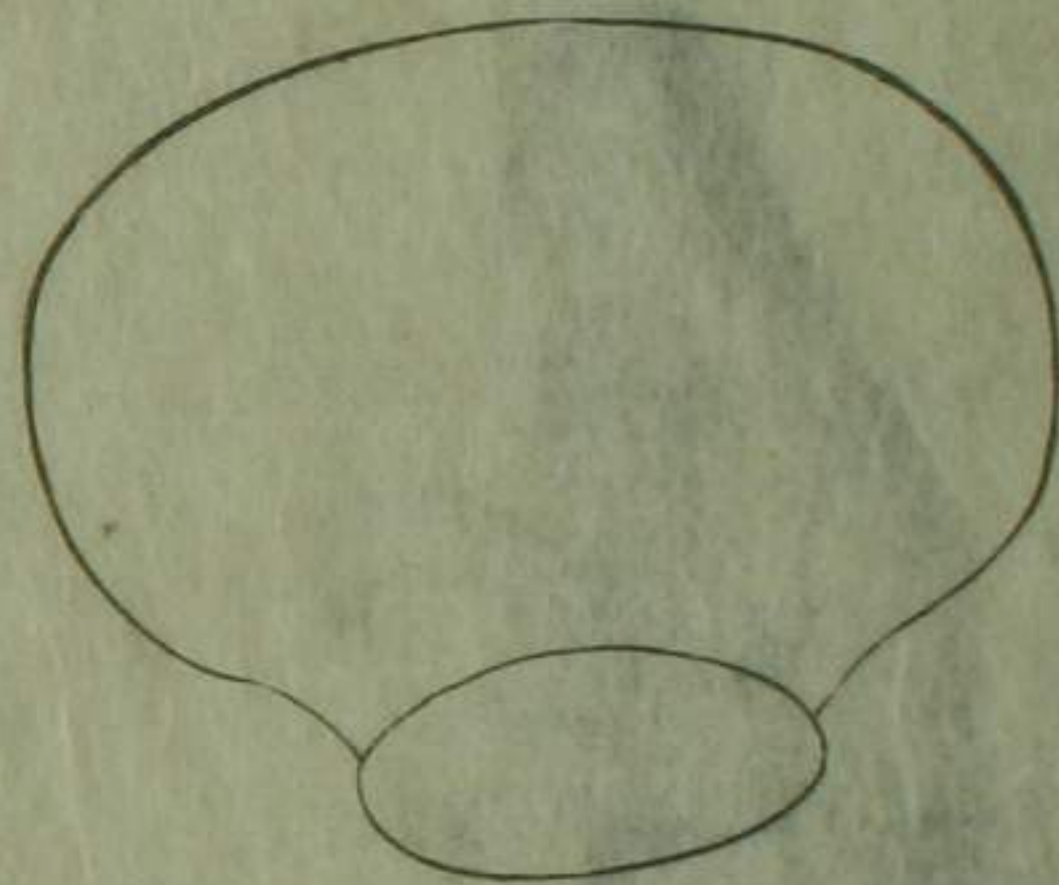
海人

全身は肉皮ありて下に毛あり。袴を著るるに似たり。その人持る事あり。
むらさきはあきあり。陸地へのかり。故日あきも死せざるものこと也



吸玉 すくたま 雲名ホツツ
ベントラガ

吸玉ハ早のすくく
指がらむむそのの
方はなすはひり
あのは息するや
よのり吸玉より
志はるり



此玉ハ硝子にて作
何れもて作らる
物之は硝子細を
よのりそ能と為と

強朝顔の盃



阿蘭陀びん

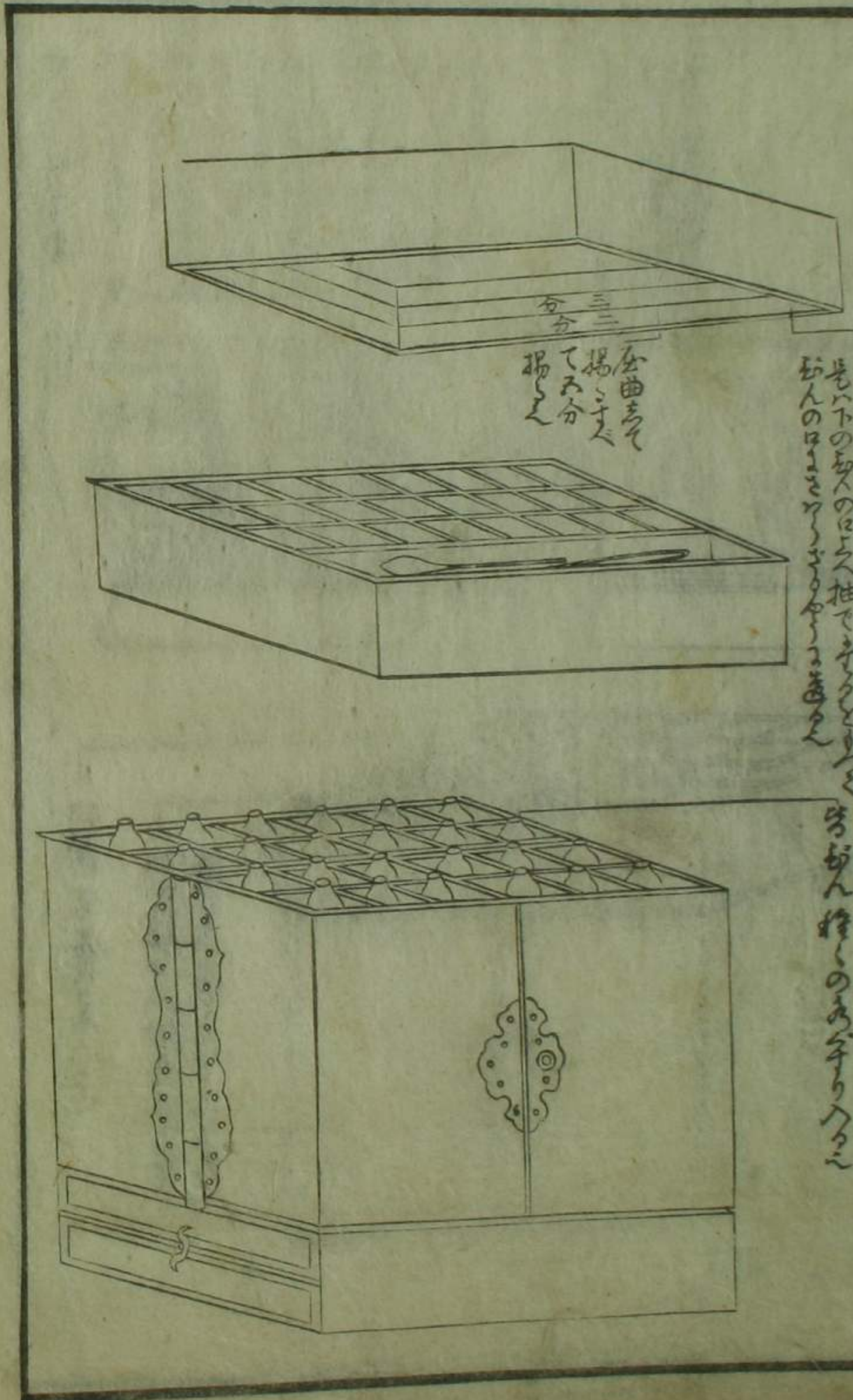
阿蘭陀びんとはそのびんまあとへまびくたあの瓶一切の粉茶を紙密に
茶葉のそれざるやうなるものなり。うすく造り方とらふ。平茶瓶
るもの中よ。ぬめやくるびく。瓶口は傍より入るもの。彼地より携ふ
りれ。硝子瓶なるもの。造り方とらふ。その瓶を大小造るもの。其の
びを便なる箇に付。あやどす。其の瓶とてと製す。其の傍より入るもの
傍一箇に付。
或は又入りより
瓶くとあやどす



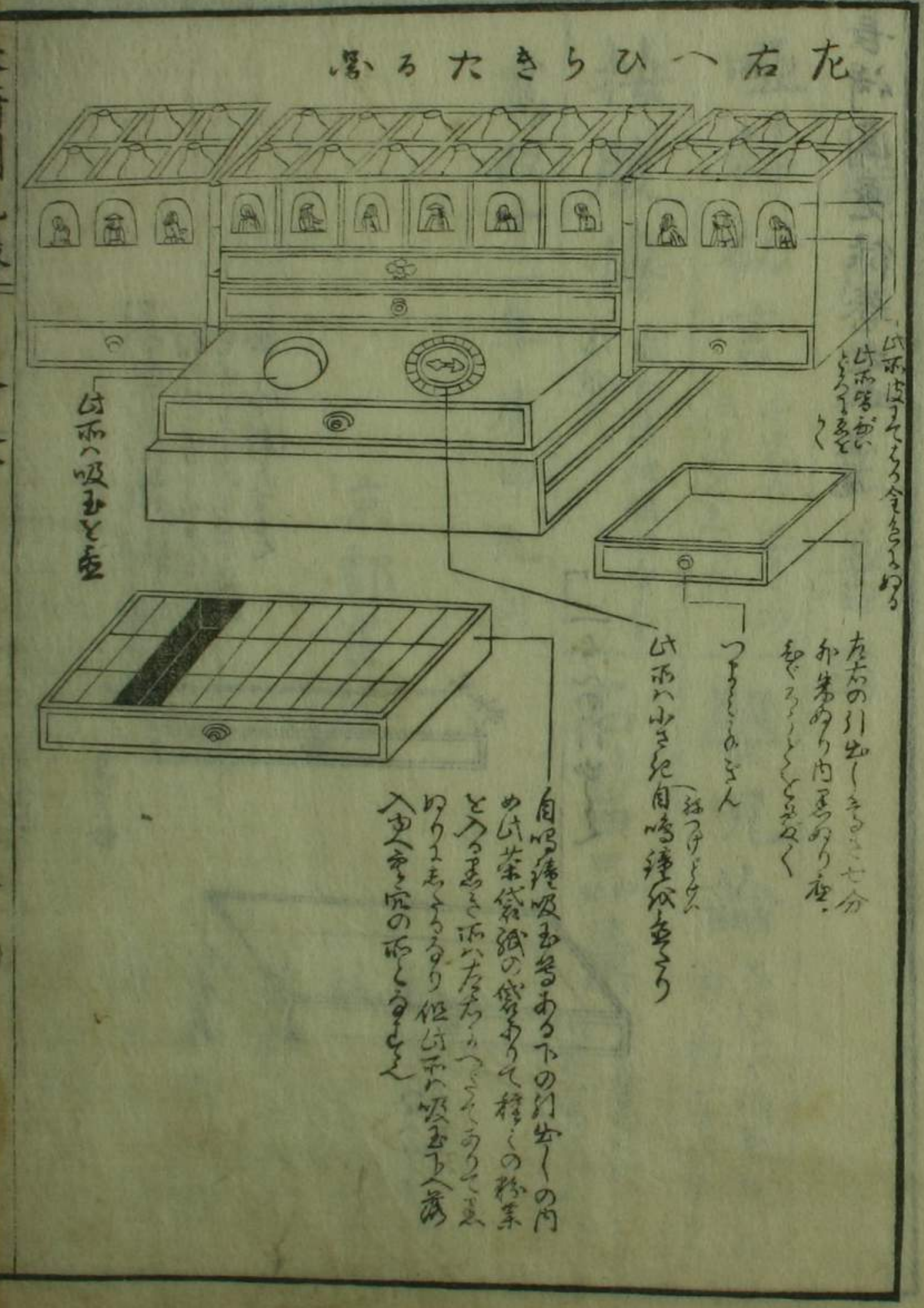
膏茶入れのまじりたる器

膏茶の入れたる器の裏の仕上げは
是の下に木の口を抽てその中に
おんの口をさし入りたる器

おん種々のみなり入り



右一ひろき大なる器

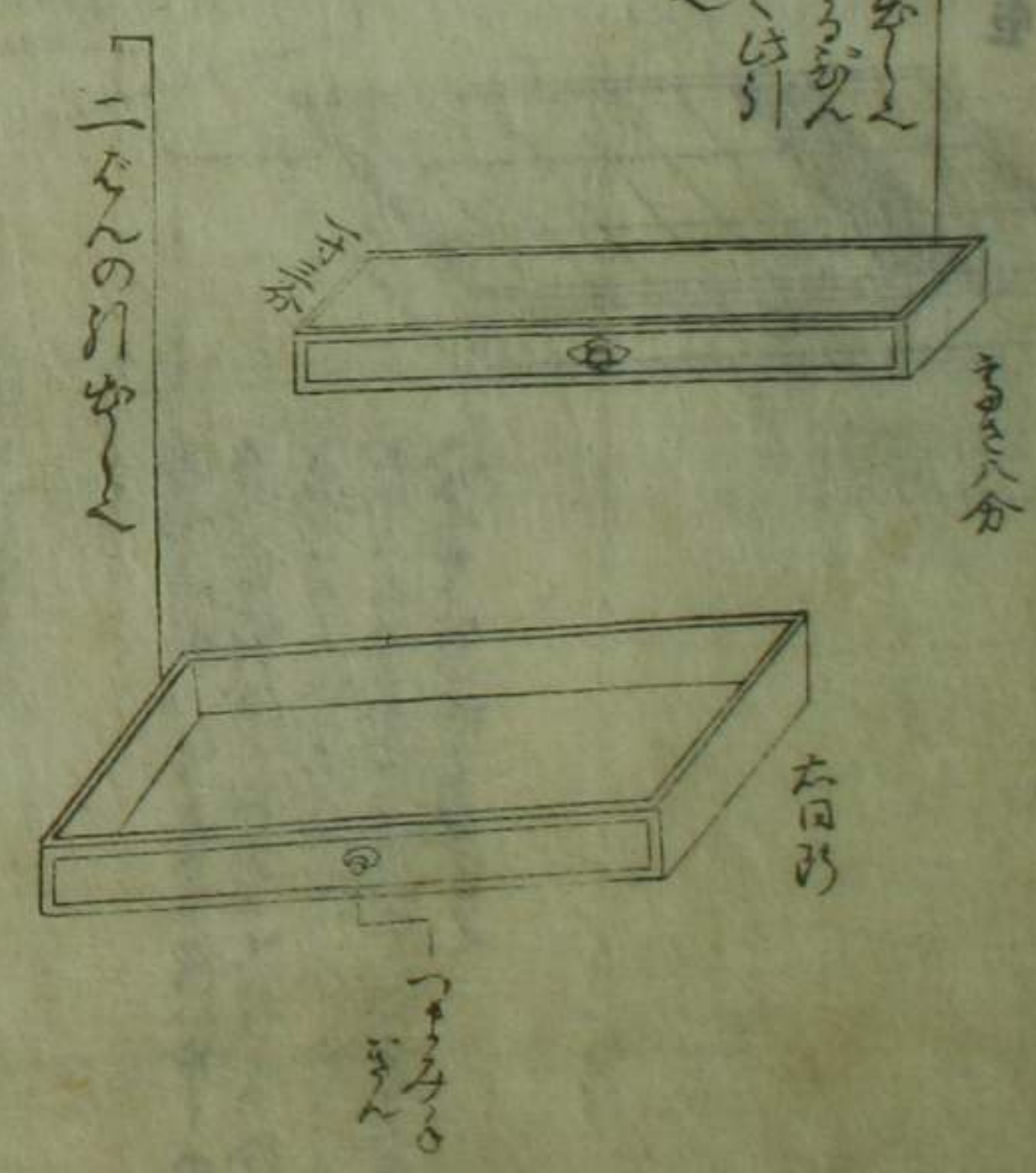


自然の吸玉と壺ある下の引出しの内
は茶袋紙の袋ありて種々の粉茶
と入りたる器はたまたまありて
ゆりよまよるなり但しおんの吸玉と壺
入りたる器の所はあり

おんの口をさし入りたる器
おんの口をさし入りたる器
おんの口をさし入りたる器

長崎聞見録卷之五 大尾

初んの下にある引かき
後の方よりいんきり引
皆長崎の文法と云くは引
出しを越くすらん



廣川先生著目

啞科初言

小児の初生の
治法と云らん

按腹傳

臍疝流按腹の事と
云らん

嬰兒論

大尾用士補著廣川按
傷を論の文法と云らん

石菖品彙

大石菖の種と集
画家の圖と云らん

寛政十二年庚申九月

京都書林

大坂書林

林 伊兵衛

林 喜兵衛

藤井孫兵衛

淺野弥兵衛

森本太助

岡田新治郎

カ
子
ノ
月

